



# 農作業メモ

## 麦わらのすき込みと

## 縞葉枯病防除のポイント

### 麦わらの有効活用を！

これから麦の収穫や田植えが本格的に始まります。麦わらは窒素、カリ、リン酸などを豊富に含む有機物資源であり、土壌にすき込むことで地力が高まります。焼却処分せず、有効に活用しましょう。

### 麦刈り

麦わらはバラ落とせせず細断し、ほ場一面に散布しましょう。代かき時の浮遊量を減少させるため、麦わらは15%以上と長めに切断しましょう。

### 耕うん

作土が浅いと麦わらの密度が高くなってしまうため、深く耕うんし、麦わらの密度を低くします。可能であれば、アップカッターロータリー（逆転ロータリー）を使用することで、麦わらの大半を土壌深部に埋め込むことができます。

### 代かき

代かきは、トラクタの尾輪の跡に水がたまる程度の極浅水状態で、低速で行いましょう。麦わらの浮遊や吹き寄せを防ぎます。例えば荒代かきを通常の水加減で行い、その後水が引いた頃に極浅水で植代かきを行うと、水位調整がしやすく行えます。田植えも極力水がない状態で行いましょう。

### 基肥

麦わらの分解促進のため窒素を多めに施用します。10%あたりに窒素成分で1.25%程度を目安に増肥しましょう（表1）。

表1 麦わら分解促進のための増肥の目安

肥料銘柄例	施用量 (kg/10a)
化成肥料14-14-14 (14-14-14)	7~18

で土壌中の窒素が増加するため増肥の必要はなくなります。

### ガス抜き

麦わら分解時に発生するガスによる害を予防するために、移植後3週間を目安に田面が露出するように落水し、ガス抜きをしましょう。田植え後まもなく高温等の影響でガスの発生が見られた場合には、速やかに落水しガス抜きをしてください。

### イネ縞葉枯病対策

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病です。県内では、ヒメトビウンカのウイルス保虫率がやや増加傾向にあり、イネ縞葉枯病の多発が懸念されます。イネ縞葉枯病は発病してからの防除はできないため、ヒメトビウンカを防除することが重要です。以下の対策により防除を徹底しましょう。

①イネ縞葉枯病に抵抗性を持たない「コシヒカリ」や「キヌヒカリ」を作付けるときは、箱施用剤でヒメトビウンカの初期防除を必ず行い、ま

う（表2）。

「彩のかが

やき」や「彩

のきずな」

などのイネ

縞葉枯病抵

抗性品種を

作付けする

ことも対策

のひとつと

なります。

②育苗期間中

は、寒冷紗

などで苗床

を被覆する

ことでヒメ

トビウンカ

の侵入を防

ぎましょ

う。

表2 ヒメトビウンカに登録のある主な箱施用剤

薬剤名	適用病害虫名	使用量	使用回数	備考
ルーチンアドスピノ箱粒剤	内穎褐変病、いもち病、ウンカ類 等	50g/ 1箱	1回	使用時期、使用方法については、対象病害虫によって異なりますので、ラベルを確認して下さい。
ツインターボフェルテラ箱粒剤	内穎褐変病、いもち病、ウンカ類 等			

【記載農薬は平成30年4月11日現在の登録状況に基づいています。】  
農薬を使用する際には、必ず使用農薬のラベルを確認しましょう。